

リターン・フォーキン
やせっぽちの
バニラード

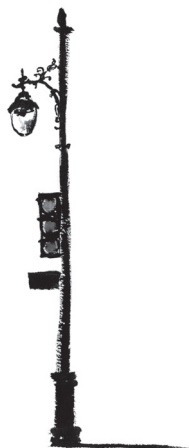
太郎次郎社
エディタス

クリス・ロビンソン ●● 著
土居伸彰 ●● 訳

ジ
ャ
ー
ビ
ス
・
ロ
ビ
ン
ソ
ン
・
ニ
ー
ル
に

Contents

目次



8
====
フィルムグラフィー

11
====
あんたが部屋に入ると

14
====
神は知っている

20
====
俺のなかのその男

24
====
準備はいいかい？

29
====
ダウン・ザ・ハイウェイ

40
====
セイヴド

43
====
夏の日

49
====
ズタズタになって、汚れて

123	119	109	99	96	93	79	68	60	54
アイム・ノット・ゼア	あんたが望んでいたものは	道化師 ジョーカー が盗人に言うには(3)——ライアン・ラーキン 1973～1978	三人の天使	終わることなきさよならを	ウインターロード	道化師 ジョーカー が盗人に言うには(2)——ライアン・ラーキン 1963～1972	夜の父親	もう戻れない	道化師 ジョーカー が盗人に言うには(1)——ライアン・ラーキン 1943～1962

204

訳者解説

198

ハイランズ

190

考え方を変えなくちゃ

175

流れ者の逃亡

166

世界が堕ちていく

156

道化師^{ジ・カ}が盗人に言うには(4)——ライアン・ラーキン 1978〜

149

トウイードル・ディーとトウイードル・ダム——ある空想上の会話

131

変わっちゃった



本書に登場するおもな人物

ライアン・ラーキン

クリス・ロビンソン：本書の著者

ケリー：著者の妻

ジャービス：著者の息子

レーシャ：フェスティバル・スタッフ

クリス・ランドレス：カナダのアニメーション作家

『ライアン』の監督

Filmography

ライアン・ラーキン || フィルモグラフィー

ライアン・ラーキン

1943年6月31日、カナダ、モントリオール郊外のドーヴァルに生まれる。

19歳、カナダ国立映画制作庁（NFB）に就職。

22〜3歳、『シティスケープ』『シランクス』を制作・発表。

25歳、『ウォーキング』でアカデミー賞ノミネート。

28歳、『ストリート・ミュージック』完成。

34歳、NFBを去る。

2000年6月、モントリオールの路上で物乞いをしていたラーキンと、
本書の著者クリス・ランドレスが会おう。

2007年2月14日、肺ガンにより他界。63歳。

路上生活を脱して『スペア・チェンジ』を制作中のことだった。



シランクス

1965年／カナダ／3分

クロード・ドビュッシーの同名の無伴奏フルート曲に触発され、制作された一作。美しいニンフのシランクスと牧神パンが登場するギリシャ神話を描いている。木炭画の技法によって生みだされる流れるようなキャラクターの動きが、ギリシャ神話の主要なモチーフである変身とマッチしている。

©1965 National Film Board of Canada.



シティスケープ

1966年（発表）／カナダ／1分

都会の喧噪に打ちのめされていく男の心象風景が、木炭画を用いたアニメーションの技法によってグロテスクに描きだされる。テスト作品として制作された本作は巨匠ノーマン・マクラレンをはじめカナダ国立映画制作庁（NFB）の面々をいたく感心させ、『シランクス』制作のきっかけとなった。

©1966 National Film Board of Canada.



ストリート・ミュージック

1972年／カナダ／9分

路上で演奏する2人のミュージシャンの実写映像が線画に溶け込むと、そこからは驚くような「意識の流れ」的なアニメーションが展開する。音楽の調子にあわせて分けられたいくつかのパートで構成され、異形の生物や人体が軽やかに浮遊し、メタモルフォーゼがはてしなく続く。

©1972 National Film Board of Canada.



ウォーキング

1968年／カナダ／5分

「歩く」という動きに焦点をあてた作品。キャラクターたちの歩く姿は、リアルな描写から色彩と形の染みへとさまざまに表現を変えていき、最終的には、走りまわり、踊るなど、動くことそのものがもつ喜びへと解放されていく。第42回アカデミー賞ノミネート作品。

©1968 National Film Board of Canada.



ライアン

2004年／カナダ／14分
監督：クリス・ランドレス

クリス・ランドレスがライアンにおこなったインタビューをベースにした、3DCGアニメーションによるドキュメンタリー作品。ランドレスが「心理的リアリズム」とよぶ斬新なキャラクター・デザインが、実写では不可能な精神的な深みを登場人物に与えている。第77回アカデミー賞受賞作品。

©2004 1380098 Ontario Inc. /
National Film Board of Canada.



スベア・チェンジ 小銭を

2008年／カナダ／7分
監督：ライアン・ラーキン、
ローリー・ゴードン

スベア・チェンジ——小銭をくれませんか。この題材で、彼以上に真実味のある物語を語れる人間はいないだろう。久々の復帰作として、ライアンはみずからの路上生活をテーマにドローイングを描きはじめた。だが制作途中に他界。残された数々の素材をもとに仲間たちの手で完成された。

©2008 MusiVision / National Film Board of Canada.

彼は自分自身を探している。だが彼にはそのような考えを受け入れる準備などできていない。なぜなら、われわれみなと同じく、彼が探しているのは永遠の救い主だからだ。

——フィリップ・K・ディック『ヴァリス』

さまよう少年、あまりに真剣になっちゃってさ。

——ボブ・ディラン「ジョアンナのヴァイジョン」

You Walk into the Room

あんたが部屋に入ると

二〇〇七年二月十六日、ハリファックス空港、ロビー。

出発までにはまだ時間があつた。ロビーに腰掛けて、メールをチェックする。そのひとつに目が止まった——モントリオールのアニメーション作家ライアン・ラーキンが、二日前の二〇〇七年二月十四日に死んだ、そんな知らせだった。

そのメールを見て、俺はとても複雑な気分になった。彼のことをよく知らない連中が、「天才の悲劇」みたいな大げさな表現を振りまわすのだろうな、と考えてうんざりした。ライアン・ラーキンはアーティストとして天才だったわけじゃない。四本の作品を作り、そのどれもが彼を待ちうける素晴らしい未来を約束するようなものだった。しかし、『ウォーキング』を除けば、傑作とまではとてもいえない。彼の作品はとりとめがなくて不完全で、少しばかり彼自身の人生と似ていた。

俺はヘレン・ヒルのことを思った。二〇〇七年一月四日、ニューオリンズで殺されたアニメーション作家だ。三十六歳だった。ライアンが死んだ夜、俺はハリファックス（ヘレンが五年間暮らしてい

た街だ）の上映イベントにいて、彼女が地元の芸術家コミュニティに尋常でないインパクトを与えていたことをじかに感じた。ヘレンは寛大で、エネルギーに溢れ、爆発的なほどに楽観的で、みんなの人生を文字通り変えていた。みながよいほうに向かうことができるよう背中を押し、言い訳なんか決してしなかった。自分の人生、そして自分の属するコミュニティに対して責任をもたねばならないと、強く信じていた。そしてその短い生涯で、自分の人生すべてを絞りだした。

そう考えると、ライアンの物語はとりわけ悲劇的であるのかもしれない。ライアンは彼女と比べたら長すぎるほどに生き、自分の人生を変えてくれるはずだった数えきれない機会を無駄にした。いつも何かにびくついて、言い訳ばかりだった。そしてようやく変われそうに思えたとき、人生にこう言いはなれたわけだ——悪いな、坊や。遅すぎたんだよ。

二人の人生は異なっている。だが、ヘレンと同じようにライアンの人生もまた、多くの人たちにインパクトを与えていた。俺もその一人だった。

ライター・ラーキン
やせっぽちの
バラード

ここでは何かが起こってる

でもそれが何なのか、あんたにはわからない
そうだろう、ミスター・ジョーンズ？

——ボブ・ディラン「やせっぽちのバラード」

神は知っている

うちは英国国教会だったが、家族は誰も教会にいなかったし、家のなかに宗教らしきものはまったく見当たらなかった。洗礼は受けさせられたが、母も祖父母（俺を育ててくれたのは彼らだ）も、とりあえず念のために、という感じだったと思う。だからもし本当に神がいることがわかったとすれば、少なくとも、尻でも隠して自分を守らないといけない。いや、この場合頭か……〔尻を隠す、という分の身を守る、という意味。ここでは、頭に水を注ぐ洗〕
礼の儀式になぞらえて、頭という表現が加えられている〕

だが宗教的なものとは無縁の環境だったとはいえ、天国、地獄、神、悪魔、罪、そういったもの、ことを考えると俺はため息が出てしまったし、息が詰まりそうになるくらいに憂鬱な気分にもなった。六歳のとき、ベッドに寝ころんでパンツに手を突っ込んでみると、「本当はパパじゃない人」に見つかった。彼はすぐさま俺の手をパンツから引っこぬき、こんなことはそりゃあもう悪いことなのだと俺を叱った。だが、なぜ悪いのかその理由については説明してくれなかったので不十分だったにちがいない。その後の三十四年間、俺の手はくり返しその場所を訪問しつづけている。

その年のイースター、「本当はパパじゃない人」が『子どものための聖書』を買ってきた。プレゼ

ントとしては妙だったが、今から考えると、チョコレートをただ与えたりするよりはよっぽど筋がとおっている。おそらく、俺のあの例の肉欲の罪のせいだったのだろう。「見ろ、自慰なんかするやつにはこんなことが待ってるんだ」——「本当はパパじゃない人」はそう言いたかったにちがいない。その絵本仕立ての聖書のなかで語られる物語のひとつが、俺の脳裏に焼きついて離れない。生まれたばかりの赤ん坊のイエスを探すヘロデ王が、イエスが見つからないことに腹を立て、兵士たちに、ベツレヘムに行つてすべての赤ん坊を殺してこいと命令する場面だ。文章には挿絵がついていた。残忍な顔をした兵士が、恐怖に怯える母親の腕から赤ん坊を奪い取る様子が描かれていた。その背景には、死んだ赤ん坊が何体も横たわっている。俺はこのシーンに恐怖し、何日も悪夢を見ることになった。これが神さま、イエスさまなの？　これが天国なの？　自分の身体に触っていると、こんなことになっちゃうの？　これが罪なの？

もっとも鮮烈だったのは、十代前半の頃の出来事だった。女の子の友だちとその家族と一緒にモントリオール・エクスボズ〔現ワシントン・ナショナルズ。一九六九年から二〇〇四年まで、モントリオール・エクスボズという名前でモントリオールを本拠地としていたアメリカ大リーグの野球チーム。二〇〇五年にワシントンDCに移転し、チーム名も改称〕の試合を観にいったあとのことだ。彼女の家族はとても感じのいい人たちだったが、かなり強烈に宗教的なタイプだった。その夜は彼女の家に泊まることになり、俺はその子に例の天国と地獄の話について訊きいてみた。会話の内容を詳しく覚えてるわけではないが、彼女が話す地獄の描写はクソツタレなほどに俺を怖がらせ、今に至るまで、どうしても消えてくれない。炎、悪魔、そして未来永劫続く苦しみ。そういう話だったと思う。

こういった出来事は、息苦しいほどの罪の意識を俺に残した。とはいえ、俺があらさまに怖がっていたかといえそうではない。青春時代の俺は、盗みもしたし、ケンカもしたし、セックスもしたし、そう、オナニーだってやめなかった。俺はイヤイヤながら罪人をしていたのであり、苦しみの渦に巻き込まれながらも、天国にも地獄にもどちらにも入っていないこうとはしなかった。英国国教徒であるのは退屈で、でも地獄は恐ろしかったのだ。

俺がどうして恐怖を感じていたのか、今ではわかる気がする。俺は行きずりの二人のあいだにできた子どもだったので、自分が生きていることを根拠づけるものがあまりに希薄で、あまりに脆もろかったからだ。子ども時代の経験は、俺を何度も何度も感情的に殺しつづけた。両親は俺を必要としておらず、生物学上の父親は責任をとることを拒んでカナダから逃げだした。母親は子どもを育てるにはあまりにも幼すぎたので、何のためらいもなく祖母に預けてしまった。祖母は俺にとって聖人であり、天使であり、救い主だった。愛に満ちた優しい女性で、自分の娘が俺を育てたがらないのを見て、俺を養子にしようと考えしてくれたのだ。しかし、いったんは俺のことを諦めてしまおうとした母親は、数年してなぜか心変わりした。おそらく、子を愛することを徐々に学んでいけると思ったんじゃないだろうか。ある日、俺の母親が、私の息子を愛してくれて、そして世話してくれてありがとうと祖母に言いに来た。それは、俺が祖母のもとから引き離される合図だった。母親は結婚してくれる男を大慌てで探しまわり、その男を見つけた。パーティーで出会った男だった。二人はすぐに結婚した。二人は地獄が仲介したカップルだった。二人は俺を無視し、罵ののり、はたき、そうでないときには狂気の

沙汰のような暴力とケンカへとたがいを追い込んでいった。

この憎しみあいの世界に飲み込まれた俺は、憎悪と暴力と苦痛の竜巻を巻きおこし、まわりのものに当たりちらした。すべての人間に、俺と同じ苦しみを味わわせてやりたかった。

十五歳のとき、小さな光がみえた。「本当はパパじゃない人」が、寝室に俺を呼びだした。奴はベッドに寝転がり、足を広げ、両手を頭の後ろで組んでいた。タフガイを気どっているように見えた。また何か悪いことをしちゃったんだろうな、と思った。そしていつもの尋問が始まったわけだが、その最初の質問は予期せぬものだった。「俺はいつカナダに来た？」ヘンな質問だな、と俺は思った。わからないけど、ぼくが生まれる一年くらいまえかな、と答えた。

「ちがう」と奴は言った。

なんだか間の悪い沈黙が長いこと続いたあと、奴はさらにこのじれったいゲームを続けた。「俺はお前が生まれるまえ、カナダになんか来たことはない」

予想外だった。二人の結婚が俺の生まれた数年後だというのは知っていた。でも、まさかこの男が自分の父親じゃないなんて、そんなことは考えてもみなかった。

俺は啞然とし、同時に救われた気分にもなった。「本当はパパじゃない人」(この瞬間から心のなかでこう呼ぶことにしたのだ)のことはそれほど好きじゃなかった。もちろん、スポーツを教えてくれたりとか、ときには悪くないこともあった。でもたいていは、奴のことが怖かった。我慢強さをカケラもちあわせておらず、俺の努力を喜んでくれることなど一度もなかった。家に友だちがくればい

つも、いやみやあてこすりを浴びせかけた。それがチャーミングでクールで子どもたちに受けるだろうと考えていたらしい。大間違いだ。友だちは奴がクソバカだと思っていたし、たいていの連中は俺の家に来たがらなくなった。

だが、思いがけない事実は判明したものの、生物学上の父親については誰も何も教えてくれなかった。「本当はパパじゃない人」はそいつについては何も知らなかったし、母親もそのことはまったく話そうとしなかった。

しかしこの事実は俺の人生を変えた。俺はそれまで、地獄へと深く深く下りていていた。しかし、ダンテのように、よろめき、転げおちたあげく、ようやく星に触れるほどの高みにまで登っていきることになったわけだ。生物学上の父親は俺にとってのベアトリーチェ『神曲』にて煉獄にいるダンテを天国へと導いた女性になった。本当の父親は別にいる。その事実は、「家族」という名のこの墮落しきったケツタイな場所から俺を救いだしてくれたのだ。

祖母を取りあげられてから、俺はつねに救い主を探しつづけていた。あらゆるところに救いを見いだそうとしていた。ホッケーカード、ホッケー選手、スポーツ、酒、セックス、ケンカ。俺に何かしらの感情を抱かせてくれるものなら何でもよかった。俺は確かに生きてはいた。でも、生気などなかっただんに動きまわっているだけだった。自分が何者なのか、何を望んでいるのか、さっぱりわからなかった。将来何になりたいか、これからの五年間で何をしたいか、そんな教師の質問を嫌っていた（多くの人もそうだったろうが）。答えなど何もなかったからだ。自分が今どこで何をしているかわか

らないのに、将来のことなんかわかるわけじゃないじゃないか。

父親に関する真実は俺を解放した。ただ、かならずしもいいかたちではなかった。「家庭」だったものが「ホテル」になった。家は家族の誰もが気まぐれに出入りするだけの場所になってしまい、たがいにコンタクトをとりあうことは少なくなった。みなで食卓を囲むこともなくなった。母親は地下室に閉じこもってテレビを観ていた。俺は自分の部屋を避難所にした。食事や洗濯のとき以外、ほとんどそこを離れなかった。俺は自分を受難者に仕立てあげた。ニセモノの両親であるそいつらを恐れたり、気にしたりする理由が、これまで以上に見いだせなくなった。言うことをきく必要性も感じなくなった。「本当はパパじゃない人」に感じていた怖れは軽蔑の気持ちへと変わっていった。両親と極端に距離をおき、門限を無視し、学校をサボった。酒の量が増え、万引きをして、ケンカの数も多くなり、家では罵りあいをした。俺は悪魔になったのだ。

本当の父親のことをよく想像した。金持ちかな。幸せかな。同じ状況におかれていた人間はほとんどそうだと思うが、想像では、本当の父親は大きな窓や庭のある白くて巨大な家に住んでいた。そこでは太陽はつねに輝き、家族はいつもみなで集まって、食べ物も飲み物もたくさんあって、笑いも絶えない。そこは天国だった。